

# ダニエル書 - 第百六十二番

ローマの預言の時：幻視を解き明かす

Jeff Pippenger

2024-03-27

ローマは幻を確立し、その「時」に明らかにされる。これはホワイト姉妹の発言で、彼女が当然のこととして理解されるべき点を述べている：

「黙示録は封印された書であるが、同時に開かれた書でもある。それには、この地球の歴史の最後の日々に起こるであろう驚くべき出来事が記録されている。この書の教えは明確であって、神秘的で不可解なものではない。その中では、ダニエル書と同じ系統の預言が取り上げられている。神はいくつかの預言を繰り返しておられ、それによってそれらが重んじられるべきものであることを示しておられる。主は重要でない事柄を繰り返されることはない。」 Manuscript Releases, 第9巻, 8.

「主は重大な意味を持たない事柄を繰り返して語られることはない」。そして、ローマに結び付けられた「時」は、繰り返し、繰り返し語られている。ローマに結び付けられたその「時」を理解することは、「きわめて重大な意味」を有する。なぜなら、それこそが、幻を確立する主題としてのローマを明らかにするからである。教皇権の支配による千二百六十年は、ダニエル書と黙示録において、直接に七回言及されている。

彼は、いと高き方に逆らって高慢なことばを語り、いと高き方の聖徒たちを疲れ果てさせ、時と律法を変えようと企てる。彼らは一つの時と二つの時と半時のあいだ、彼の手に渡される。ダニエル書 7:25

また私は、川の水の上にいる亜麻布をまとった人が、右の手と左の手を天に挙げ、永遠に生きておられる方にかけて、これは一時、二時、そして半時のあいだであると誓い、また、聖なる民の力を打ち砕き散らすことが成し遂げられるとき、これらすべてのことが終わると言うのを聞いた。ダニエル書12章7節。

しかし、神殿の外側の庭は除いて、測ってはならない。それは異邦人に与えられているからである。また、彼らは聖なる都を四十二か月の間、踏みにじるであろう。黙示録 11:2

また、わたしは、わたしの二人の証人に権威を与える。彼らは粗布をまとって、千二百六十日の間、預言する。ヨハネの黙示録 11:3

そして女は荒野へ逃げた。そこには神によって彼女のために備えられていた場所があり、彼女がそこで千二百六十日の間養われるためであった。ヨハネの黙示録 12:6

また、その女には大いなる鷲の二つの翼が与えられた。彼女が荒野にある自分の場所へ飛んで行き、そこで蛇の顔を避けて、一時と二時と半時のあいだ養われるためである。黙示録 12:14.

また、彼には高慢なことや冒瀆を語る口が与えられ、四十二か月のあいだ活動を続ける権威も与えられた。黙示録 13:5.

これら七つの直接的な言及は、ローマのさまざまな具体的な預言的特質を示している。ローマが明らかにされるのはこれらの箇所においてである。ホワイト姉妹は、これらの期間は「三年半、または1260日」とも表されていると付け加えている。聖書の中には「三年半」も「千二百六十日」も見いだせない。ホワイト姉妹は、七つの言及に基づく計算をそれに応じて適用しているにすぎない。

第13章(1~10節)には、「豹のような」もう一つの獣が記されており、竜がその獣に「自分の力と座と大いなる権威」を与えたとある。この象徴は、多くのプロテスタントが信じてきたように、かつて古代ローマ帝国が持っていた権力と座と権威を継承した教皇権を表している。豹のような獣については、次のように述べられている。「彼には大きなことばと冒瀆を語る口が与えられ……。そして彼は神に対して冒瀆して口を開き、その名とその幕屋と天に住む者たちを冒瀆した。さらに、彼には聖徒たちと戦い、彼らに打ち勝つことが許され、すべての部族、言語、民族の上に権威が与えられた。」この預言は、ダニエル書7章の小さな角の記述とほとんど同一であり、疑いなく教皇権を指し示している。

「『彼には四十二か月のあいだ続ける権威が与えられた。』そして預言者は言う。『私は、彼の頭の一つが、まるで死に至るかのような傷を負っているのを見た。』さらに、『捕囚に引いて行く者は捕囚に行き、剣で殺す者は剣で殺されなければならない。』四十二か月とは、ダニエル書7章にいう『一時と二時と半時』、すなわち三年半、または1260日に当たり、教皇権が神の民を迫害することになっていた時期である。この期間は、前述のとおり、西暦538年に教皇権が至上の地位を確立したときに始まり、1798年に終わった。そのとき、教皇はフランス軍によって捕らえられ、教皇権は致命的な傷を受け、『捕囚に引いて行く者は捕囚に行く』との予言が成就した。」『大いなる論争』439頁

三年半を、ローマを「明らかにする」「時」と見なすという靈感による権威のもとで、ローマに関する他の聖書の言及が浮かび上がる。

しかし、まことにあなたがたに言う。エリヤの時代、天が三年六か月のあいだ閉ざされ、全土に大飢饉があったとき、イスラエルには多くのやもめがいた。ルカ 4:25

エリヤの三年半は、その時期をテアテラの教会において教皇ローマの象徴であるイゼベルと結びつけている。

しかしながら、あなたにはなお非難すべき点はいくつかある。自分を女預言者と称するあの女イゼベルが教え、わたしのしもべたちを誘惑して淫行に陥らせ、偶像にささげた物を食べさせているのを、あなたは容認しているからである。わたしは彼女にその淫行を悔い改める機会を与えたが、彼女は悔い改めなかった。黙示録 2:20、21。

イゼベルに象徴される第四の教会に与えられた「時」は、「空間」でもある。

エリヤは私たちと同じような性質の人間でしたが、雨が降らないように熱心に祈りました。すると、三年六か月の間、地上に雨は降りませんでした。ヤコブの手紙 5:17

四十二か月が千二百六十日と同じであると論じながら、ホワイト姉妹はその期間を、キリストが言及した「あの日々」とであると述べている。

ここで言及されている期間——「四十二か月」と「千二百六十日」——は同じであり、いずれもキリストの教会がローマからの迫害に苦しむ時期を表している。教皇権の至上支配の1260年は西暦538年に始まり、したがって1798年に終結した。そのときフランス軍がローマに侵入して教皇を捕らえ、彼は流刑の地で死去した。ほどなく新たな教皇が選出されたが、教皇制度はそれ以前のような権勢を二度と振るうことはできなかった。

教会に対する迫害は、1260年の全期間にわたって続いたわけではなかった。神はその民へのあわれみにより、彼らの激しい試練の時を短くされた。教会に降りかかる「大患難」を予告して、救い主は言われた。「もしその日々が短くされなければ、救われる者はひとりもない。しかし、選ばれた者たちのために、その日々は短くされる。」マタイ24章22節。宗教改革の影響により、迫害は1798年以前に終わりを迎えた。The Great Controversy, 266.

キリストとホワイト姉妹は、「あの日々」という表現を、教皇ローマを指し示す「時」として特定している。ダニエルは第十一章三十一節で、教皇権が地上の王座に据えられたことに続いて起こった迫害について語るとき、その迫害の時を「多くの日々」と呼んでいる。

彼の側で軍勢が立ち上がり、要塞の聖所を汚し、日ごとの献げ物を取り除き、荒廃をもたらす忌むべきものを据える。契約に逆らって悪を行う者たちを、彼は甘言によって墮落させる。しかし、自分の神を知る民は堅く立って行動する。民の中の悟る者たちは多くの人々を教え導く。しかし彼らは、剣と炎、捕囚と略奪によって、長き日々にわたり倒れる。ダニエル書 11:31-33.

ローマは、それに結びついた予言的な時と関連して明らかにされる。だからこそパウロは、不法の人が「彼の時」に現れると言うのである。私たちが知らなければ滅びるその「幻」をローマが確立しているという事実は、なぜその予言的な時がこれほど頻繁に、しかもさまざまな仕方で示されているのかを明らかにしている。というのも、神は「大して重要でない事柄を繰り返されることはない」からである。前の節では、その期間の終わりも示されている。

そして、民のうちの賢明な者たちは多くの者を教え導く。だが彼らは多くの日のあいだ、剣と火、捕囚と略奪によって倒れる。彼らが倒れるとき、わずかな助けが与えられるが、多くの者がへつらいをもって彼らに付き従う。さらに、賢明な者たちのうちの幾人かは倒れ、彼らを試し、清め、白くするためであり、それは終わりの時に至るまで続く。というのは、なお定められた時のためだからである。ダニエル書 11:33-35

「終わりの時」は「なお、定めのための時である」。ヘブライ語で「定め」と訳される語は「モエド」で、固定された時、すなわち約された期日を意味する。ダニエル書における「定めの時」の予言的な関連性と重要性は、その語がどれほど頻繁に言及されているかによって示されている。1989年「終わりの時」であり、したがって1989年「定められた時」であったと認識しているラオデキア的なアドベンチストは、いたとしてもごくわずかである。それは、神が十四万四千人の運動のための知識の封印を解かれるときとして、神によって設けられた約された期日であった。このため、ダニエル書には、「定めの時」が「終わりの時」の到来を告げることを証する証言が与えられている。ダニエル書8章にお

いて、この預言的な象徴が示されている。

そして私はウライの兩岸の間から人の声を聞いた。その声は呼ばわって言った、「ガブリエルよ、この人にその幻を悟らせよ。」そこで彼は、私の立っているところに近づいて来た。彼が来ると、私は恐れて地にひれ伏した。しかし彼は私に言った、「人の子よ、悟れ。この幻は終わりの時に関するからである。」さて彼が私に語っている間、私は顔を地に向けて深い眠りに落ちていた。しかし彼は私に触れ、私を起こして立たせた。そして彼は言った、「見よ、私は憤りの終わりに起こることをあなたに知らせよう。終わりは定められた時に来るからである。」ダニエル書 8:16-19

第十一章の場合と同様に、これらの節における「終わりの時」の「終わり」という語は、「定められた」と訳されている語とは異なるヘブライ語である。終わりの時は、定められた時に始まる期間を表している。「定められた時」(moed)は取り決められた期日であり、「終わりの時」(ヘブライ語で「gets」)は、定められた時に始まる期間である。それはローマを明らかにする「時」であり、その「時」は非常に重要なので、その期間の終わりへと、その終わりに続く期間は、複数の証人によって示されている。ダニエル書第十一章二十四節では、異教ローマが『時』のあいだ世界を支配すると示されている。

象徴的な「時」は三百六十年である。聖書の一年は三百六十日だからである。異教ローマは「時」のあいだ支配し、教皇ローマは「一時と二時と半時」のあいだ支配した。現代のローマは、象徴的な「一時間」、すなわち象徴的な「四十二か月」のあいだ支配する。1844年以降には予言的な時間はないので、「一時間」と「四十二か月」とは、間もなく来る日曜令から人類の猶予期間の終わりまでの期間を指す。しかし、異教ローマが覇権をふるったのは、紀元前31年のアクティウムの海戦から、コンスタンティヌスが330年に帝国の首都をコンスタンティノーブルに移すまでである。これから挙げる節々が異教ローマを語っていることは、キリストが、十字架にかけられたときに「打ち碎かれる」「契約の君」として描かれていることから分かる。そのとき支配していた権力は異教ローマであったので、これから見る節々は異教ローマを特定している。

そして彼の地位には卑劣な者が立つ。彼には王位の榮譽は与えられないが、彼は穏やかに現れ、へつらいによって王位を得る。洪水のような軍勢によって、彼の前から彼らは押し流され、打ち碎かれる。契約の君もまたそうである。彼と盟約が結ばれた後、彼は欺きをもって事を行う。彼は上って来て、少人数でありながら勢力を得る。彼はその州の最も肥えた所にさえ平穩のうちに入り、父祖たちもその父祖たちも成しえなかったことを行う。彼は戦利品と略奪物と富を彼らの間にばらまき、また、しばらくの間、堅固な要塞に対して策略を巡らす。ダニエル書 11:21-24.

これらの節の最後の句にある語「against」は、実際には「from」を意味しており、その節は、異教ローマがその本拠地(ローマ市)「from」から三百六十年間支配する(彼の策略を予測する)と述べている。

第24節 彼はその州の最も肥沃な所にさえ平安のうちに入り、彼の先祖たちもその先祖の先祖たちも成しえなかったことを行う。彼は獲物と略奪物と富を彼らの間に分かち与え、しかも、一定の時まで、要塞に対してその計略を巡らす。

ローマ以前の時代に、諸国が価値ある地方や豊かな領土に進出する通常の方法は、戦争と征服によるものだった。ところがローマは、父の代にも祖父の代にも行われなかったこと、すなわち、これらの獲得を平和的手段によって受け取ることを行おうとしていた。以前には聞いたこともない慣行——王が遺贈によってその王国をローマ人に譲るといふもの——が、ここに始まったのである。ローマはこのようなしかたで広大な属州を手中に収めた。

そして、このようにしてローマの支配下に入った人々は、そこから少なからぬ利益を得た。彼らは温情と寛大さをもって遇された。まるで獲物や戦利品が彼らの間に分配されるかのようにであった。彼らは敵から守られ、ローマの権力の庇護の下で平和と安全のうちに安んじて過ごした。

この節の後半について、ニュートン主教は、その意味を、要塞に対してではなく要塞から策謀をめぐらすことだと解している。ローマ人は、七つの丘の都という強固な要塞から、まさにそれを行った。「一定の時までも」。これは疑いなく預言的な「時」、すなわち360年である。では、これらの年数はどの時点から起算すべきか。おそらく次の節に示される出来事からであろう。

25節。彼は大軍を率い、南の王に対抗して力と勇気を奮い起こす。南の王もまた、非常に大きく強力な軍勢をもって戦いに駆り立てられる。しかし彼は持ちこたえられない。彼に対して策略が巡らされるからである。

「第23節と第24節によって、私たちはユダヤ人とローマ人との同盟、すなわち紀元前161年のこちら側へ、すなわちローマが普遍的支配権を獲得した時代へと導かれる。今私たちの前にあるこの節は、南の王、すなわちエジプトに対する強力な遠征と、巨大かつ強力な軍勢同士の間で行われた著名な戦いの発生を提示している。このような出来事は、ちょうどこの頃のローマの歴史の中に実際に起こったのであろうか。——実際に起こった。それはエジプトとローマとの間の戦争であり、その戦いとはアクティウムの海戦であった。この衝突へと至る事情を簡潔に概観してみよう。」ウリア・スミス『Daniel and the Revelation』271-273頁。

以下の諸節で、ダニエルは定められた時と終わりに再び言及している。

彼は大軍をもって南の王に向かい、その勢力と勇気を奮い立たせる。南の王もまた、きわめて大きく強力な軍勢をもって戦いに臨む。しかし彼は立ちおおせない。彼らが彼に対して策略を企てるからである。まことに、彼の食卓にあずかる者たちが彼を滅ぼし、彼の軍勢は押し流され、多くの者が倒れて殺される。この二人の王の心は悪事を企み、同じ食卓で偽りを語る。しかしそれは成功しない。終わりはなお定められた時にあるからである。そののち彼は多くの富を携えて自分の国に帰る。彼の心は聖なる契約に逆らい、思うままに振る舞って自分の国へ戻る。定められた時に彼はまた戻り、南に向かう。しかし、それは前の時のようでも後の時のようでもない。ダニエル書 11:25-29。

第八章で、ガブリエルは、「chazon」、すなわち二千五百二十年の幻が定められた時に終わり、その後「終わりの時」と表現される期間が始まることを明らかにした。この箇所における定められた時とは、異教ローマが世界を完全に支配する三百六十年の終わりを指す。この箇所には「終わりの時」は存在しない。というのも、その歴史の期間の終わ

りに解かれるべき封印されたものは何もなかったからである。

ダニエル書第八章において、「憤りの最後の終わり」の幻、すなわち二千三百年と同時に終結した二千五百二十年は、「終わりの時」まで封じられていた。というのは、両方の幻の定められた時であった1844年に、第三天使の光が封を解かれたからである。ダニエル書第十一章三十節から三十六節においては、1798年の「最初の憤り」の終わりに、「終わりの時」として表される期間があることになっており、その時に第一天使の光が封を解かれた。それゆえ、異教ローマの時の預言には終わりの時はなく、ただ定められた時があるのみであり、それは三百六十年がいつ終結したかを示すものであった。しかし、1798年の定められた時と1844年の定められた時は、いずれも「終わりの時」として表される期間において理解されるべき一つのメッセージの封を解いたのである。

ローマは、その予言的な時において予言的に表されているとおりに明らかにされる。「一時と二時と半時」「四十二か月」「千二百六十日」「三年半」は、暗黒時代に教皇権が支配した期間を表す、さまざまな象徴の一部である。ミラー派の運動と十四万四千の運動を結びつける期間は百二十六年である。百二十六は千二百六十日の象徴でもある。というのも、それはその十一、すなわち十分の一だからである。1863年の反逆から1989年の定められた時までの百二十六年は、1989年を、神が終末の民と会うために定めた時として示している。

次の記事でこの研究を続けます。

私たちはどのようにして聖書を調べるべきでしょうか。自分の教義という杭を次々と打ち込み、そのうえで、聖書全体を自分たちの確立した意見に合うように整えようとすべきでしょうか。それとも、自分の考えや見解を聖書の前に差し出し、真理の言葉である聖書によって、あらゆる面から自分の理論を測るべきでしょうか。聖書を読み、さらには教えている多くの人々でさえ、自らが教え、学んでいる尊い真理を理解していません。真理が明確に示されているのに、人は誤りを抱きます。もし彼らが、自分の教義を神の言葉の前に差し出して吟味し、自分の考えを正しいと証明するために自分の教義の光に照らして神の言葉を読むことをやめるなら、彼らは暗闇と盲目の道を歩かず、誤りを温存することもないでしょう。多くの人は、聖書の言葉に自分の意見に都合のよい意味を与え、神の言葉の誤った解釈によって自分自身を迷わせ、他の人々をも欺いています。神の言葉の学びに取り組むときには、謙遜な心で臨むべきです。あらゆる利己心も、独自性への執着も、脇に置かなければなりません。長く抱いてきた意見を無謬のものに見なしてはなりません。ユダヤ人が、長年にわたって確立してきた伝統を手放すことを拒んだことこそが、彼らの滅びを招きました。彼らは、自分たちの意見や聖書の解釈に欠陥があることを決して認めまいと固く決めていました。しかし、人がどれほど長くある見解を抱いてきたとしても、それが書かれた神の言葉によって明確に支えられていないのであれば、捨て去るべきです。

真理を心から求める者は、自分の立場を調査と批判にさらすことをためらわず、自分の意見や考えが反対されても腹を立てない。これは四十年前、私たちの間で大切にされていた精神であった。私たちは魂に重荷を負って集まり、信仰と教理において一つとなれるよう祈った。なぜなら、キリストは分裂しておられないことを知っていたからである。一度に一つの点だけを取り上げて調査の対象とした。これらの探究の会合は

厳肅さに満ちていた。畏敬の念をもって聖書を開いた。しばしば断食もし、真理をよりよく理解できるよう備えた。熱心に祈ったのち、なお理解できない点があれば、それを論じ合い、各人が自由に意見を述べた。そして再び祈りにひざまずき、私たちが見解を同じくし、キリストと御父が一つであられるように私たちも一つとなれるよう、神が助けてくださることを切に天に願い求めた。多くの涙が流された。もしある兄弟が、自分が理解しているようにはその箇所を理解しない、その理解の鈍さのゆえに別の兄弟を戒めることがあっても、叱責されたほうはのちにその兄弟の手を取って、「神の聖霊を悲しませないようにしましょう。イエスは私たちと共におられます。へりくだり、教えられやすい心を保ちましょう」と言い、すると声をかけられた兄弟は、「赦してください、兄弟よ。私はあなたを不当に扱いました」と応じた。それからまた祈りの時を持ち、ひざまずいた。私たちはこのようにして多くの時間を費やした。ふつう一度に共に学ぶのは四時間を超えることはなかったが、時には、私たちの時代のための真理を理解するために、夜通し厳肅に聖書を探究することもあった。ある折には、神の御霊が私に臨み、難解な箇所が神の定められた方法によって明らかにされ、そのとき完全な調和が生まれた。私たちは皆、心を一にし、同じ御霊を持っていた。

私たちは、聖書が誰の意見にも合わせてねじ曲げられることのないよう、最も熱心に努めた。重要性の低く、意見の分かれる論点にはこだわらないことで、相違をできるだけ小さくしようとした。しかし、誰もが心に負っていた重荷は、兄弟たちの間に、キリストが父と一つであるように弟子たちも一つとなるようにというその祈りにかなう状態をもたらすことだった。ときには、一人か二人の兄弟が提示された見解に頑なに反対し、心の自然な感情のままに振る舞うことがあった。しかしそのような気配が現れると、私たちは研究を中断して会合をいったん散会とし、各自が神に祈りに行き、他の者と話すことなく、その相違点を天からの光を求めつつ探究する機会を持てるようにした。私たちは親しみの言葉を交わして別れ、できるだけ早く再会してさらに研究を進めた。ときには、神の力が顕著に私たちに臨み、真理の要点が明らかにされたときには、私たちはともに涙し、喜んだ。私たちはイエスを愛していた。私たちは互いを愛していた。

当時、神は私たちのために御業をなしてくださり、真理は私たちの魂にとって尊いものでした。今日の私たちの一致は、試練に耐えうる性質のものでなければなりません。私たちはここで主の学校にあって、天の学校に備える訓練を受けているのです。私たちは失望をキリストのようなしかたで耐え忍ぶことを学ばなければならず、そこから教えられる教訓は私たちにとってきわめて重要なものとなるでしょう。

「私たちには学ぶべき教訓が多くあり、また、身につけてしまったものを捨て去らねばならないことも、実に数多くある。過ちがないのは神と天だけである。大切にしている見解を決して手放す必要はなく、意見を改める必要など決して生じないと考える者は、失望することになる。私たちが頑なに自分の考えや意見に固執し続けるかぎり、キリストが祈られた一致を得ることはできない。」 Review and Herald, 1892年7月26日。